KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

使用価値におけるデザインの可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2025-03-19 キーワード (Ja): マーケティング, 使用価値, デザイン, エスノメソドロジー, ルールに従うこと キーワード (En): 作成者: 大谷, 泰斗 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/0002000322

使用価値におけるデザインの可能性

大谷 泰斗

要旨

マーケティング論の競争的使用価値に関する研究において使用価値の創発が議論されてきた。本論文はこの議論に参画し、使用価値の創発概念へのアプローチを拡張・補完することを目的とする。これまでの議論では、生活者が必ずしも用いるわけでない製品デザインの物質性や身体性という外的な要因により使用価値の創発概念へのアプローチが行われてきた。本論文ではこのようなアプローチを外在的とし、それとは異なるアプローチを提案する。このアプローチは、実際の使用場面で生活者の用いる概念に即したモノの使用の理解という意味で、内在的に使用価値の創発概念に迫るものである。そして、既存研究で創発する使用価値に対する視点として取り入れられたデザインについて内在的アプローチからその可能性を検討する。

キーワード：マーケティング、使用価値、デザイン、エスノメソドロジー、ルールに従うこと

1. はじめに：競争的使用価値再訪

生活者に何らかの形で役に立つことによってモノ・サービスは使用価値となる。より正確に述べればモノやサービスは、生活者により使われ何らかの役に立つことで、そのつど使用価値が発見される (Marx & Engels 1962)。

このモノの使用価値を巡り論争が展開された。石原-石井論争である¹⁾。そこでの基礎的な命題は、交換に先立ちモノの価値実現を担う使用価値を規定することはできない。つまり、モノの使用価値やそれに対応する人間の欲望は超歴史的に規定できないということである。

生産・マーケティングはモノの使用・消費を予定するが、その際の生活者・消費者の欲望は、マーケティングみずからの諸活動により (操作的に) 創出される。この欲望にマーケティングが対応することで、使用価値が実現される。このように、マーケティングと消費の関係は相互依存的に定式化されることとなる。

しかし、この普遍ではない使用価値のダイナミズムの考え方を巡って論争が行われた。石原 (1982) においては、企業間の競争プロセスのうちで使用価値は創出・改訂され、競争プロセスに消費者の欲望は規定されると考えられた。ここにおいてマーケティングは、自らの製品に対する排他的欲望を創出するために、消費者の欲望を操作しようとする²⁾。

対して石井（2004）においては、使用価値は競争プロセスで生じつつさらに、生活者の商品の使用プロセスにおいても変化すると指摘をした。すなわち、生活者の使用において「使用価値はコンテキストに応じて変化する」（p. 279）という意味で偶然的・恣意的ということである。「パソコンは人を殴る道具」（p. 57）でありうるし、「手元の机は、もの書き用にも、もの置き用にも、食事用にも、踏み台用にも」（p. 279）なりうる。これより、マーケティングさらには（研究者を含む）観察者がア priori に仮定した使用価値を、生活者がその通りに使用するとは限らないことが導かれる。

その後この使用価値の恣意性は、消費の恣意性というべきものであり、そのことで使用価値が全面的に恣意的であるということではできない（石原1996）。その意味で、使用価値は偶然的要素を含む他でもありえた偶有的な価値であるという理解で論争は一応の収束をむかえる。

この使用価値の偶有性は、変化する使用価値の現実を理解する枠組みである。言い換えれば、企業の競争プロセスから生まれた製品と消費の偶然を伴う接点で、新たな使用価値が事後的に創発する。企業の意図した使用価値といった構成要素に還元できないという意味での使用価値の創発（プロセス）概念に迫る枠組みとして、偶有性を捉えることができる。

この使用価値の創発概念の議論に本論文は参画する。モノの使用価値は、他でもありうる可能性に開かれている（偶有的）ことから使用のコンテキストに応じて変化・創発する。けれども、それはなんでもあり（あらゆる可能性に開かれている）というわけではない。そこで、偶有的な使用価値の外部の制約要因が石井（2007）や西川（2010）により検討されている。石井（2007）では、競争的使用価値に対する長期的に相互作用する外的要因として製品デザインの「物質性」と「身体性」、そして創発を捉える視点としてのデザインを導入することで、偶有的な使用価値の議論を進展させている。西川（2010）では、製品デザインの物質性や身体性に制約されて新たな使用価値が創発するのは「使用場面」であり、競争から生じるものではないことから、使用場面において創発する使用価値を「創発的使用価値」として概念化している。

本論文では、このような使用価値の創発概念へのアプローチを拡張・補完することを目的とする。具体的には、石井（2007）による外的要因としての物質性と身体性から使用価値の創発概念に迫るアプローチを外在的とし、それとは異なるアプローチを提案する。このアプローチは、実際の使用場面で生活者の用いる概念に即したモノの使用の理解という意味で内在的に使用価値の創発概念に迫るものである。本論文では内在的なアプローチが、使用における創発に迫ることがマーケティングにおいて新たな使用価値の発見に関わる点、これまでとは異なるアプローチであり創発概念に対して理解を深めることが期待できる点から意義をもつと考える。また、近年の記録装置や媒体の進展により、生活者が用いる概念のもとでモノの使用をみるものが以前よりも容易になっていることを踏まえれば、本論文で提案する内在的なアプローチは検討に値すると考える。

本論文の構成は以下のとおりである。まず、競争的使用価値の議論における使用価値の事後成立が Kripke (1982) を経由したウィトゲンシュタインの規則の懐疑をもとに構成されていることを確認し、使用価値・ルールが事後成立することの本論文における課題を導出する。次に、Kripke (1982) の懐疑の源泉であるウィトゲンシュタインの規則をめぐる議論を概説することで、クリプキと異なるルールの従い方を指摘する。それはルールと行為が不可分であるとするもので、この考えのもと課題の検討を行い、使用・行為に対する内在的アプローチを提案する。最後に、既存研究で創発する使用価値に対する視点として取り入れられたデザインについて内在的アプローチからその可能性を検討する。

2. ルールの事後成立における課題

使用価値が偶有的であるという理解は、使用価値の変化に迫る利点を有する反面、次の困難な問題を生じさせる。使用価値が偶有的であるなかで、いかにして人びとの意思決定・行為が成立するかという問題である。

使用価値が生活者の使用において創発しうることから、どのような形で商品が生活者の役に立つかは事前に確定しえない³⁾。そうであれば、生活者の使用の「規則はあとから見いだされ」(柄谷1992, p. 50) ざるを得ない。つまり、使用価値の意味・意味を規定するルールは事後的に形成される。このことは繰り返し石井 (1998, 1999, 2004, 2012) により指摘されてきた命題である。

ルールが遅れてやってくるという事態をここでは、ルールの事後成立と呼ぶ。このことは、マーケティングが生活者に対し商品の使用価値を提示したとしても、それを超える形での生活者の解釈を許容することから、使用価値の解釈はひとつに定まらないことを帰結する。

そうだとすれば、マーケティングの諸活動や商品の使用における事前の意思決定には「不確定性」と、ルールは事後成立するのだから偶然に身をまかせるしかないという点で「無根拠的危うさ」とがある(柄谷1992)。

このことを石井 (1999) では、ウィトゲンシュタインを讀解し形成された Kripke (1982) の懐疑論をもとに展開している。そこでは、例えば冷蔵・保存を機能とする機械(冷蔵庫)が、無限に多様でありうる文脈に依存する(生産者の想定を超えた)形で生活者により創発的に使用された際に、それを「機械の新能力の発見(例えば極寒地域における解凍)」と「機械の誤用(例えば儀礼用の祭壇)」を区別する正当性の根拠は、現にそう使われていることからないとしている。そのような区別が可能になるのは、製品の新たな能力や生産者の意図からの逸脱といった誤用という可能性が現れてから(他者により)後追いでその妥当性を判断するルールが形成することによる。この際に新たな能力や誤用は、使用場面に外在的で事後的なルールで判断さ

れる点で等価な身分である。そしてこの判断は、外在的で事後的であるため何らかの前提（基準）を必要とし、前提はさらにその前提というように無限に問いうるという意味で無根拠ないし恣意的であるとされる。

しかし、「われわれにとって消費やマーケティングは、それほど無根拠な営みではない」（栗木1996, p. 273）というように、現実にはマーケティングや商品の使用（消費）が行われているのであり、そこではなんらかの決定が意味をなす。

ここで新たな問いが生まれる。それは、「根拠はないにもかかわらず、未来に向けての意思決定のための秩序（規範）はどのようにして生まれるのか」（石井2012, p. 182）というものである。

人びとがなんらかの判断のもとで行為する事態を考えると、そこには事前にある根拠を要する。つまり、「みずからの行動を『やらなければならないもの』としたり、あるいは『これしか道がないもの』として必然の様相のもとに置」（石井2012, p. 200）くことで、その行為の正当化を図る。

しかし、この正当化という根拠づけは無根拠たらざるを得ない。なぜなら、正当化の根拠を自ら作り出す必要があるという意味で自己言及的だからである⁴⁾。けれども、無根拠であるならば人びとは行為することはできない。人びとが行為できるためには何らかの根拠が必要である。そこで持ち込まれるのが仮の必然性という見せかけである（栗木1996）。自己言及的構図において、必然が承認される根拠を問えば循環の連鎖・無限後退に陥る。この循環の連鎖が何らかの形で切断されれば、一時的にはあれ必然が仮のものとして形成される⁵⁾。自らの必然性を自らが作り出すという事態が、循環の連鎖の切断により隠ぺいされ、あたかも必然性が外部から与えられるかのように見える事態に変容する。このことで、意思決定の根拠が与えられる。しかし、栗木（1996）や石井（2012）において繰り返し指摘されているように、この必然性はあくまで一時的なものであり、絶対的必然ではない。

従って選択や決定は、それを正当化する根拠がないという意味で恣意的であり、ルールが事後成立することから「暗闇の中での跳躍」とならざるをえない（Kripke 1982; 石井1999）。

その後、偶有的に開かれた競争的使用価値の創発プロセスについては、なんでもありというわけではないことから、それを基礎づける長期的に相互作用する「物質性」と「身体性」という外部要因、そして創発を捉える視点としてのデザインが石井（2007）により提起される。

商品の物質性は、重さ・大きさ・素材・技術といったあるモノの実現の可能／不可能を区別する素材性と、「あらかじめ想定した（実現可能・不可能の区別）以上にモノが使えてしまう」という潜在性を考慮に入れることで、パッケージやマテリアル（質料）を内包する製品デザインの視点から、使用価値の変容・機制を捉えようとするものである。

身体性は、ブルデューの「ハビトゥス」概念に由来し「知覚以前に形成された、知覚のため

のフレーム」であり、「生活者の身体に刻み込まれた性向」とされ、生活者の対象への知覚・評価図式を規定する (Bourdieu 1979; 石井 2007)。そして、生活者の身体性がモノの使用さらには欲望の制約要因となる。

西川 (2010) は、この物質性と身体性を再検討している。そこでは、企業間の競争により変容する競争的使用価値概念に物質性や身体性は関係がなく、それらが使用価値と関係するのは「使用場面」においてであることが指摘される。そして、使用場面において使用価値が創発するプロセスを「創発的使用価値」とし、製品デザイン (物質性) と行為 (身体性) の相互作用が創発の鍵であるとしている。この相互作用を観察することが新たな使用価値の発見につながるとされる。

ここまで、石原 - 石井論争により提起された偶有性のもとで使用価値の創発に関わる、使用価値のルールが事後成立するなかでいかにして人びとが意思決定するかという問題、さらにはそのプロセスを基礎付ける外部要因、及び創発を捉える視点についての議論の展開を概観してきた。その構図は以下のようにまとめることができる⁶⁾。

- (a)(競争的) 使用価値が定式化された規則 (例えば製品の属性) によってのみ決まるわけではなく、生活者の使用の中で産出されうるという不確定性・決定不全が提示される。
- (b)しかし、現実にはなんでもありというわけではなく、(秩序だった) 行為が遂行される。
- (c)使用価値が偶有的であるなかで、なぜいかにして未来に向けて意思決定が可能になるか、その機制は何かという新たな問いが提示される。
- (d)ルールが事後成立する中で、規則が不変のものでないという理解のもと、自己言及的循環の連鎖の切断により仮のものとしての必然性の形成という機制が仮定され、行為が可能になる。そして、このような中での使用価値の創発は、製品デザインの「物質性」と「身体性」という外部要因により制約され、使用場面で製品デザインの視点からそれらの相互作用を観察することで提示される。

こうしてみると、ここに規則に従うことに関する懐疑が見てとれる。規則が行為を導くという想定のもと、規則とそのもとでの行為を切り離し、その間にギャップ (空隙) を見ようとする。そしてギャップの存在が、行為が規則によって一つに決まらないという決定不全と規則の事後形成を引き起こす。このギャップを埋めるべく、絶対的な根拠のない規則に仮の必然性という意思決定を支える要因と使用価値の創発の外部要因が指摘 (導入) される。

これらの議論は、モノの使用価値が必然的でないことを明らかにした点、さらに使用価値が創発するプロセスを捉える点で重要である。けれども、ここに2つの課題をみることができる。

第1に、観察者が使用価値の創発的な変化を捉えるうえで、Kripke (1982) の懐疑論を踏ま

えて展開されたルールは事後的に成立するという命題が、後追いでしか使い方を誤用と判断できないという点である。確かにコンテキストに依存する形で使用価値は多様でありうる。けれども、後追いでではなく誤用であると判断できる使い方がありうると考えられる。

第2に、使用価値が創発するプロセスに迫るうえで、外部要因がアプローチに導入された点である。使用場面における物質性と身体性の相互作用の観察を通じて新たな使用価値は捉えうる。このアプローチは、被観察者の身体性と物質性が相互作用する中で使用価値の生起を製品デザインの視点から観察する際に、身体性と物質性という諸概念が観察者により理解されていけばよい。つまり、観察者がそれを通じてみる概念は被観察者に把握されている必要はない、という想定があると考えられる。しかし、被観察者・生活者のモノの使用は、ある状況で目的を達成するうえで何らかの概念の理解のもとにモノを用いる有意味な行動である。そうであれば、使用価値が創発するプロセスに迫るうえで生活者の用いる諸概念に即して観察するという意味で、内在的にもアプローチすることが可能であると考えられる（Winch 1958; 山田2020）。

これらの課題を考えるうえで、石井（1999）がルールの検討の際に参照している Kripke（1982）とその懐疑論の源泉である Wittgenstein（2009）の「規則に従うこと」についての議論を確認する。そして、ウィトゲンシュタインの議論のクリプキによる解釈とは異なるものとしてウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジー（以下 EM）の議論を紹介することで、課題の検討を行う。

エスノメソドロジーは人々の方法論を意味し、人々の方法のもとに実際に行われていることを解明する研究である。ウィトゲンシュタイン派 EM はウィトゲンシュタインの規則についての議論を参照し、具体的状況で人々によりどのように概念が用いられているのかの分析を行っている。従って、使用場面で使用価値が創発するプロセスへの内在的アプローチを考察するうえでウィトゲンシュタイン派 EM をみることで示唆を得ることができると考えられる。

3. 「規則に従うこと」におけるクリプキとウィトゲンシュタイン

クリプキによれば、哲学者の Wittgenstein（2009）は規則が行為を導くということに対して「規則のパラドックス」という議論を提起したとされる。そして Kripke（1982）はこれを「哲学的懐疑論の新しい形」（邦訳 p. 11）として展開を図った⁷⁾。

Kripke（1982）の懐疑論は Wittgenstein（2009）の『哲学探究』の201節の引用から始まる。それは、「我々のパラドックスは次のようなものだった。規則は行動の仕方をどのようにも決定できないであろう、というもどのような行動の仕方もその規則と一致させられるのだから」（邦訳 p. 173）というものである。ここから、Kripke（1982）は加法という規則に関する懐疑を導入する。加法という規則を把握している者が、人生ではじめて「68+57」という計算を行

うとする。当然加法を把握しているのであるから「125」という答えを得る。しかし懐疑論者が現れて、答えは「5」だと主張する。計算する者が従ってきた規則は「クワス」という関数で、57よりも小さい数の場合は「プラス」、そうでなければ5を解とするものだからだと懐疑論者は言う。計算する者は、「クワス」が従ってきた規則ではないことを、例えば加法の過去の経験や心的事実・傾性（disposition）に訴えて正当化しようとするが、それは叶わない。つまり、これまでの有限の事実でもって未知の計算は正当化されない。なぜなら、未知の計算ではその計算が「クワス」ではなく「プラス」を意味することを有限の事実により確定できず、またこれまで「プラス」と「クワス」のいずれに従っていたとしても、未知の計算ではどちらの解釈の成立も許すからである。

このように規則が複数の解釈を許容し一意的に解釈が定まらないという事態は一つ行為を導かないだけでなく、事後的に行為に対しいかなる規則も合致・成立させることができる。では、多様な解釈を許容する規則という考えはいかなる理路によって可能になっているのであろうか。

この規則に従うという考えには、「規則」と「規則を解釈して行為すること」（小宮2011, p. 165）とを切り離して考えるという規則観が見てとれる⁸⁾。戸田山（1994）の言を借りれば「規則をそれが埋め込まれている実践からいったん切り離し、規則（の定式化）と行為の間に『暗闇での跳躍』を行うべき亀裂を見ようとする」（p. 154）規則観である。それだけでなく、プラスとクワスの解釈を両立させるうえでなされた行為が、「中立的な『無色の振る舞い』」（松坂1995, p. 287）として観察可能であると措定されている。このように、Kripke（1982）の規則観は、規則とその解釈の分離によって一つの行為に定まらないという決定不全が構成され、行為を「無色の振る舞い」とすることで規則の事後成立を可能にしていると考えることができる。

けれども、このような規則観だけが規則に従うことに対する考え方というわけではない。ここで再び、先の Wittgenstein（2009）の201節に戻る。それは以下のように続く。

そして解答は次のようなものだった。もしすべてが規則に一致させられるなら、それに矛盾するようにもできる。従って、そこには一致も矛盾もない。

ここに誤解が存在していることは、こうした思考過程において我々が解釈を次々と重ねているということによってすでに示されている。まるでそれぞれの解釈が、少なくとも一瞬の間、それに代わる次の解釈を考えるまで我々を安心させるかのように。つまり、こんなことを言って我々が示そうとしているのは、解釈ではないような規則の見方が存在するということなのだ。その見方とは、使用のそれぞれの場面で、「規則に従う」および「規則に反する」と我々が呼ぶものの中に示されているのだ。

この誤解のために、規則に即したそれぞれの行動は一つの解釈である、と言おうとする傾向が存在するのだ。しかし「解釈」と呼ぶべきなのは、規則の表現を別の表現で置き換

えることだけなのだ。(邦訳 pp. 173-174)。

ここで議論されているのは、クリプキの規則観とは異なる規則観である。それは、規則に従ったり、反したりする行動とともに規則が示されるという規則観である。

クリプキの規則の懐疑論には、規則が行為を導くという疑似的な規則と行為の因果関係があるとエスノメソドロジストのLynch (1993) は指摘している。Lynch (1993) によれば「懐疑主義的解釈は、規則に従うことの疑似因果的な像を保持している。というのはそれは、規則に従う実践を超えてあるいはその下に、説明的な要因を探すということ、決して放棄しない」(邦訳 p. 202) ことによる。規則が行為を導くと想定するために、「規則」と「規則の解釈」の分離による規則の複数の解釈が、一つの行為は規則によって定まらないという決定不全を生みだす。そこにおいて行為の説明を可能にするために規則に影響する外的な要因、例えば事後的な共同体(他者)による正当化などを探究するのだと考えられる。

対してWittgenstein (2009) の規則に従うことについて議論は、規則が行為を導くのではなく、「私たちは『端的に (blindly)』行為する。そして、しかるべく行為することによって自分たちの(規則の一引用者)理解を示すのであって、言説的な解釈を定式化することによってそうするのではない」(Lynch 1993, 邦訳 p. 203) というものである。つまり、規則とそれに従う行為は実践においてセット(ペア)であり、規則に従うことが何であるかの理解が行為のうえに示されるという意味で不可分であるというようにウイトゲンシュタインの規則観を理解することができる(Baker and Hacker 1984; 酒井・小宮 2007)。ここでの規則は、行為に先行し行為を可能にするものである(前田・水川・岡田編 2007)。この意味で、規則は行為を導くのではなく、行為を可能にする条件の位置にあると理解することができる⁹⁾。つまり、規則は可能な行為を限定する。そして、規則が条件の位置にあることで、行為者は規則に従う行為が何であるかを理解し、あるいは知識として有し行為する。その意味で、行為者自身による言語的な説明が可能であるもとで行為は行われる。自らの行為を「人にも示せる規準で何をしているか同定することができなければ、自分自身でも何をしているか捉えられない」(石黒1993, pp. 113-114)。このように規則に従う行為は、公的・社会的にそのような行いとして認められるものである。

クリプキの懐疑論が主張するように、従い方を規則は決定できない。規則はその適応の仕方を全て先取りしているわけではない。従って、加法でこれまでプラスを意味してきたこととクワスを意味してきたことが両立する。ここからクリプキの懐疑論では規則に従うことを説明・規定する外部あるいは事後的な要因が探究される。しかし、規則の中に全ての従い方が先取りされているというように、実践(実際に行うこと)から離れて独立に規則そのものだけを解釈し規則に従うわけではない。行為のうえに規則のある理解が示されるのであり、行為が規則に従っているかどうかは規則を参照することで理解され、その理解の実践から独立に規則を解釈

することはできない。従って、規則は行為を導くのではなく、規則に従うことは1つの実践である (Wittgenstein 2009)。

クリプキの先の例で考えれば、学生が「68+57」という課題を教師から出され「125」と答えた場合、課題という相互作用のなかで加法に従いそれを用いているかぎりその実践に加法の理解が示されている (当てずっぽうで125と答えている場合は加法に従っているとはいえない)。学生が「124」・「126」・「115」などと加法に従って理解を示した場合、教師は学生が従った加法を参照することで「誤解である」と理解を示すことができる。学生が「5」と解答した場合は、誤解であり加法の理解の欠如を示していると考えられる。あるいは、学生が加法に従って解が125であると理解しながらあえて何らかの理由で (例えば問題の難易度についての教師に対する抗議) 「5」と解答した場合は、規則に背くということになる¹⁰⁾。理解の欠如か規則に背いているのかは、その学生のそれまでの習熟度が教師による判断の1つの基準になる (Wittgenstein 2009)。教師が理解の欠如と判断した場合、指導という概念のもとで加法について例を用いながら説明するであろう¹¹⁾。これも1つの規則に従った実践である。

哲学的議論ではなく社会での実践としてクリプキの懐疑論を考えた場合、プラスなのかクワスなのか決定不全であるという意味で規則に従う際の参照の対象が見失われてしまっている。従って、ある規則に従う／反するという区別、さらには正答・誤解・理解の欠如というような判断が成立しえない。そうであれば、そもそも規則に従うこと自体が有意味でなくなる¹²⁾。

しかし、このことは規則の代案はないということの意味しない。事後的に規則が変形することはありうる。けれども、それはクリプキの懐疑論のようにではない。加法の課題をしているなかで懐疑論者が唐突にやって来てそれはクワス算であると指摘したとしても、嘘か冗談、あるいは実際の行為と関連のないものとしてみなされるであろう。代案を提出・検討することは、それにふさわしい (疑いを免れていることを主題化するという) 状況における元の規則を前提とした実践である。代案の対象となる行為についても、行為者は自らの行為を「間違いであるとか、正当な代案であるとか、あるいは実践の特異な例であるなどみな」(Lynch 1993, 邦訳 p. 208) して実際に行っているわけではないし、私的にそのように信じているわけでもない。その行為は、なんらかの規則に従った実践である。従って、ある行為が規則の代案として評価され、それが事後的であれ支持されうることは、規則に従った実践の理解を前提にする (Winch 1958)。

ここまでウィトゲンシュタインの規則に従うことの議論より展開されたクリプキの懐疑論とウィトゲンシュタイン派 EM の考えをみてきた。石井 (1999) が指摘するようにクリプキの懐疑論は、実際に決定不全による膠着状態に陥るわけではないことから現実を「生じたパラドックスがすでに解決されている状態」とする考えである。対して、ウィトゲンシュタイン派 EM において現実には「そのようなパラドックスははじめからない」とする考えである (戸田山

1993, p. 153)。

続いて、ワイトゲンシュタイン派 EM の観点から 2 節で挙げた 2 つの課題を検討する。

1 つ目はルールの事後成立が後追いでしかある使い方を誤用と判断できないという課題である。ここにはコンテキストに応じて多様でありうるモノの使い方を、事後成立するルールに対して等価にみなすという前提がある (前田 2011)。つまり、複数のモノの使い方を「無色の振る舞い」とし事後成立するルールから色づけするという前提である¹³⁾。

石井 (1999) では、冷蔵・保存機能を持った機械 (冷蔵庫) の想定外の使い方として解凍機と祭壇が発見され、それらが新能力であるかを判断するルールは後追いで形成されることが指摘された。それをワイトゲンシュタイン派 EM の観点からみれば以下である。

まず、極寒地域で解凍機として別の地域で儀礼用の祭壇として機械が用いられる際に、その使用は機械の中が一定温度であるや機械が一定の高さと平面をもつというような規則に従った 1 つの実践という点である。その意味で無色の振る舞いというわけではないし、それぞれの使用の規則に照らせば役立てられなかったという意味で誤りがありうる。そして、それらの実践は冷蔵・保存機能という使用価値の規則をクワスのように相対化することを目的としているわけではない。

次に、機械の冷蔵・保存機能に照らせば、解凍機・祭壇という使い方は新能力の発見や誤用となるが、この判定の実践と解凍機・祭壇として用いる実践は水準が異なる。あらかじめ想定した冷蔵・保存機能という使用価値の規則を拡張し解凍・祭壇機能を包含しようとすれば、その後追いの判断基準はいかようにも設定できることから正当化が困難であろう。しかし、石井 (1999) により選択が参照すべきルールとしての場という形で指摘されているように、実際の使用に外部的な例えば企業内の会議で新能力の検討する際には、その企業の利害を伴って新能力である／ないという判定するという実践は可能である。そして、理由を問われれば説明可能あり基準を示せる程度に判定は合理性を有する。そうであれば、その判定は検討可能である (検討可能だからといってその判定が生活者に受け入れられるとは限らないが)。

このように考えれば、ルールの事後形成により判定されうる使い方は規則に従った実践であることから、その規則に照らしてそれに従っている／誤用であると判断できる。そして、企業にとっての思わぬ使われ方は、何らかの規則に従った実践であることからその規則を参照することで理解可能であるという意味で秩序立っている。思わぬ使い方というのは、複数の解釈が等価であることによりそれぞれの解釈が等確率で成立するというようななんでもありの状態から、偏りのある状態として生起するような秩序 (物理的) の水準にあるのではない。そうではなく、ある使い方は社会における生活者によってなされる以上、生活者の日常的な概念の使用と諸概念の結合により達成される。ここでの秩序 (社会的) は概念の適切な使用法と諸概念の適切な結合関係などの人びとの「判断の水準」にあり、この水準から使い方を理解することが

できる (Coulter 1983; 西阪1997)。

このような規則に従った実践は、西川 (2010) が創発的使用価値により指摘した使用場面での新たな製品デザインの使用価値の発見において、その前提となる。つまり、使用価値が創発するというときには、その使用が生活者の有意義な行為である限り、生活者の規則に従った公的な実践の理解を前提とする。

2つ目は、使用価値が創発するプロセスに迫るアプローチについての課題である。クリプキの懐疑論において、ある行為がどのような規則に従っているかは、事後的にルールが形成され共同体により判断される。つまり、規則に従った行為がその状況から離れて外在的に説明される。このような説明は、どのような規則に従っている行為であるか行為者に把握されることを必要としない。つまり、観察者が用いる諸概念を通じて実際の行為を理解できればよい。対して、ワイトゲンシュタイン派 EM において行為はそのうに規則の理解が示されるとするものであった。従って実際の行為は、そこで用いられている諸概念が行為者において把握され言語的に説明可能であり、かつ観察者にも諸概念が把握されるなかで理解される (山田 2020)。

この点について Winch (1958) は葉の使用を例示している。Winch (1958) によれば、葉の使用がなされるためには行為者が本を読むということを理解しており、本のページに紙片を挟むことが次にどこから読むかを示すための行為であることを理解している必要があるとしている。本を読めない幼児が本の中に紙片を挟んでもそれは葉の使用とは理解されない。加えて、葉の使用は次にどこから読むかという順序の理解も含むモノである (酒井他編 2016)。つまり、次に読む際にも本を読むことが可能であり、次に読むことを前提としていまここで葉を使用する。このような行為のうに示される理解は、それを観察する者にも観察可能である。

このように実際の行為に対する説明の仕方はクリプキの懐疑論とワイトゲンシュタイン派 EM では対照的である。つまり、実践の状況 (いま・ここ) を超えた外部の「何か」により実際の行為を理解しようとするか、実践の状況に即して理解しようとするか、という違いがある (戸田山 2019)。

実践の状況において用いられる概念に即するか、それ以外の概念を導入するかという点から、クリプキの懐疑論を外在的、ワイトゲンシュタイン派 EM を内在的アプローチと呼ぶことにする。外在的アプローチでは、観察者により形成された諸概念を通じ行為が同定され解明される。それゆえ形成された概念は、その適切さの基準の点で無限後退につながりうる。対して内在的アプローチは、行為が規則に従った実践である限り公に観察・説明可能であるという考えのもと、外在的アプローチが用いる諸概念や理論 (レンズ) を実際の行為に差し戻すことで、行為者が用いる概念のもとでその行為を理解・記述する。この際に内在的アプローチの記述が間違いを犯さないというわけではない。この記述は、観察者による実際に行われたことに対する理解の提示という1つの実践であり、その対象の行為が何であるかは行為者において把握されて

いることから修正の可能性を含むものである。このように内在的アプローチは実践に用いられている規則を吟味する可能性を有する。

以上を踏まえ石井（2007）の議論をみれば、必ずしも被観察者が用いているわけでない物質性と身体性という外的要因を通じて使用価値を記述・説明することが想定されている。そうであれば、ウィトゲンシュタイン派 EM の観点から生活者の用いる概念に即して内在的にアプローチし使用価値が創発するプロセスに迫ることも可能である。そして、内在的アプローチは外在的アプローチと両立すると考えられる。

外在的アプローチと内在的アプローチは対立するものではない。内在的アプローチは外在的アプローチを補い合うものとして次の2点から位置づけることができる。第1に内在的アプローチによる理解・記述は、それをもとにした研究者の理論形成を妨げるわけでも、マーケティングの利害関心をもった検討を妨げるわけでもない点である。むしろ、内在的アプローチによる理解・記述は反省的な理論形成や検討の前提となる。第2に、企業にとりモノの思わぬ使われ方は生活者の規則に従った公的な実践の理解を前提とすることから、内在的アプローチは使用価値の新たな発見の資源になる点である。特に近年の記録装置や記録メディアの発展は日常的場面での生活者の実践を子細に「みる」ことを可能にする。記録されたものは、内在的アプローチから分析できる。その分析・記述は、研究者やマーケティングにとって人々の方法であることから理解可能であり、理論や概念を用いても検討可能であることにより、発見・発想の資源となる（秋谷 2010）。

以上、ウィトゲンシュタイン派 EM の観点から2節で挙げた2つの課題を検討した。その結果、ウィトゲンシュタイン派 EM の観点からすれば、ルール的事後形成により判定される使用価値の創発は、生活者の規則に従った公的な実践の理解を前提とすること、そして使用価値が創発するプロセスに迫るうえで事後的にだけでなく内在的アプローチからも迫りうる事が確認された。

次いで、以上の議論を踏まえ創発する使用価値に対する視点として石井（2007）により取り入れられたデザインの可能性を内在的アプローチから検討する。

4. 内在的アプローチに基づくデザインの視点

生活者は何事かを成し遂げる際に、手元にあり状況の中に埋め込まれたモノを何らかの形で役立てる。ここでモノは、すでに何らかの設計された機能を含みかたちを有しているという点でデザインされている¹⁴⁾。デザインされたモノについてそれが何であるか・ある事柄を遂行する際にどのように用いるかというやり方の知識についての概念を生活者は持っている（Ryle 1949）。ここでは酒井他編（2016）にならって概念を「物事を捉え成し遂げる仕方」（p. iv）と

考える。このような概念は、個人的なものでも勝手に判断できるものでもない。

このようなモノはコンテキストに応じて偶然を伴い多様な使用価値を発現させるのであった(石井1999)。そうであればモノを用いた生活者の実際の行為は、他の様々な状況(コンテキスト)でも使用可能であるデザインされたモノを、ある偶然的な状況で、その特定の状況にふさわしいやり方で使うことにより、物事を成し遂げようとする行いである¹⁵⁾。

これらのことにより本論文ではデザインを、機能やかたちを含み生活者の日常に埋め込まれ様々な状況で使用できる、行為を可能にするものと考ええる。

そして、このデザインの視点から内在的に実際の行為をみることは、モノがどう動くか・どう制御されるかや、特定の使い方を前提としたデザインの使いやすさ・使いにくさ(ユーザビリティ)といった作用をみるというのではなく、目的をもった生活者がある使用場面で他でも使うことができるデザインされたモノをどのような概念のもとに用いているかをみることである。つまり、創発する使用価値にアプローチする際に、可能性の条件にある概念を具体化するものとしてデザインをみるということである(Suchman 1987)¹⁶⁾。

デザインをこのようにみることの意義は、創発する使用価値にアプローチする際に使用場面の分析に被観察者にとり外在的な要因を持ち込まずにみることを提供する点にある。このことは、外在的要因の物質性に基づく想定以上の使用という潜在性の発見や、製品デザインへの働きかけ(行為)という相互作用から創発する使用価値の議論において抜け落ちていた生活者の用いる概念を分析の俎上に乗せる。創発する使用価値において、外在的要因の発見や説明の資源として生活者の実践を位置づけるのではなく、デザインの視点から内在的にアプローチし生活者の実践において用いられる概念を分析・記述の対象にすることが既存の議論を補完する点に意義を考えることができる。

デザインの視点から内在的にアプローチし生活者の実践を記述することは、その実践を構成している行為の集まりや使用場面・行為の目的・身振り・諸概念の結びつきなどの連関を記述し社会をみせる(秋谷 2010)。このことは、デザインとマーケティングに対し特定のデザインの作用や製品技術、企業の利害といった実践に外在的要因から行為を説明することを相対化し、次の2つの可能性を示唆する。

1つ目に、デザインされたモノが他の状況でも使えるなかで特定の使用場面にふさわしい使われ方をするそのあり様を明らかにすることから、使用場面に適した使い方のバリエーションを実践の記述は示す。使用場面における実践は生活者に意識されていないことはありうるが、問われれば何をしてきたかを説明できるという合理性を有することから観察者により概念やその連関のもとで理解可能である。このような実践の吟味は、デザイナーやマーケターの評価を持ち込むことで、新たな使用価値の発見やその良し悪しの判別の契機という点で発見の資源となる。

2つ目に、デザインの視点から内在的にアプローチし実践を記述することで、どのような行為の目的・問題に対しどのようにデザインされたモノを用いて達成しているかを把握することができる。このような把握は、企業の利害や製品技術からでなく生活者において何が目的となっているのかを明確にする。この行為の目的におけるデザインされたモノを用いたはたらき・概念は、モノの異なる使い方でも他のモノを用いることでも充足可能である。つまり、「ある行為の目的を達成する際にxのあるはたらきを用いる」ことにおいて、あるはたらきという限定の中でxには様々な項が代入可能である¹⁷⁾。このように実践の目的を明確にすることで、デザインの検討からすれば、はたらきを充足する他の可能性を発見・比較することができる。従って、内在的アプローチによるデザインの視点からの実践の記述は、実践に即した代替の可能性を検討することにつながる。

このように、創発する使用価値に対するデザインの視点への内在的アプローチは、デザインされたモノと概念を伴う行為を切り離さず実践に即して理解することで、可能性の条件にある生活者が用いる概念を具体化する。このアプローチの意義は、実践を理論レンズからではなく社会的な実践として捉え、そこで用いられる概念を分析の対象とする点にある。このことは、デザインやマーケティングにおいて生活者の行為の目的から新たな使用価値の発見や代替の検討の可能性を有する。

5. おわりに

本論文では、競争的使用価値の議論より導出された使用価値の創発概念へのアプローチを拡張・補完することを目的とした。そこで検討されたのは以下である。

偶有性を使用価値は有し、その意味を規定する使用場面に外部的なルールは事後成立するという議論が、クリプキを経由したワイトゲンシュタインの規則の懐疑をもとに構成されていることを確認した。そして偶有的な使用価値の創発は、なんでもありというわけではなく製品デザインの物質性と身体性という外部要因により制約され、製品デザインの視点から観察される。

この創発する使用価値についての本論文における課題として、①ルールの事後成立が後追いでしかある使用を誤用と判断できないという課題、②使用価値が創発するプロセスに迫るにあたり物質性と身体性という外部要因から以外に内在的にもアプローチする可能性の検討という2つ課題を示した。

2つの課題を検討するうえで、ルールの事後成立の議論で参照されたクリプキとワイトゲンシュタインの「規則に従うこと」の議論、及びワイトゲンシュタイン派EMの議論をみた。そこから、規則と行為は不可分であり規則に従うことが何であるかの理解が行為のうえに示されること、及び行為者は自らの行為を言語的に説明することができ規則の知識を有し行為するこ

とから規則は行為の可能性の条件の位置にあることが明らかにされた。

この考えをもとに2つの課題を検討することで、①については生活者のある使用はそれ自体規則に従ったものでありその規則を参照することで誤用がありうること、このことと生活者のある使用をモノの新機能／誤用と企業が判定することは水準が異なり新機能／誤用の判定も規則に従った行為であることが明らかにされた。②についてはクリプキに由来するルールの事後成立を実践に対する外在的アプローチと呼び、行為を説明する規則や諸概念は、観察者に理解されていればよく、被観察者・行為者に把握されている必要はないものとして特徴づけた。対して、規則に従うことが何であるかの理解は行為のうえに示されることから、生活者の用いる概念のもとに実際の行為を理解するアプローチを内在的アプローチと呼んだ。そして本論文では内在的アプローチを、行為を説明する規則や諸概念が観察者だけでなく行為者においても理解されている中でのものとして特徴づけ、創発する使用価値へのこれまでとは異なるアプローチとして提案した。その意義については、内在的アプローチと外在的アプローチは相補的であり、内在的アプローチによる分析が反省的な理論形成や外在的な概念を用いた検討の前提となること、及び発見・発想の資源となることを指摘した。

既存研究で創発する使用価値を捉える視点として取り入れられたデザインの可能性を内在的アプローチから検討した。本論文ではデザインを機能やかたちを含み生活者の日常に埋め込まれ様々な状況で使用できる実際の行為を可能にするものとし、内在的アプローチからすればデザインの視点が生活者の用いる概念を具体化することを指摘した。その意義は物質性と身体性の相互作用というデザインの視点に概念を分析の俎上に載せる点にある。

このような内在的アプローチは記録装置・媒体の発展により実行可能性を有すると考えられる。今後、内在的アプローチによる分析が資源となり、新たな使用価値やモノのデザインの発見・発想を得ることが期待される。

注

- 1) 詳細については石井・石原 (1996) を参照のこと。近年のこの論争に対する再検討の動きについては松井 (2013)・本條 (2015)・川口 (2018) を参照のこと。
- 2) この操作には①競合企業との競争による相殺②消費者の嗜好と抵抗力の形成という限界がともなう (石原1982)。
- 3) 例えばこのことは、東レの実用品として開発された眼鏡レンズ拭き「トレーシー」を生活者が贈答用品として使用価値を見出した (石井2004)。ネスレのキットカットがチョコレート菓子だけではなく、縁起物というかたちで生活者に使われた (石井2007)。建築現場などで養生として使われるカモ井加

- 工紙のマスキングテープが、手帳やスマホなどのデコレーションに活用される（小川2013; 吉田2013）、など枚挙にいとまがない。
- 4) この点を栗木（1996）と石井（2012）に倣って述べると以下である。二者間関係を考えれば、主体Aの必然はみずから承認によって得られるのではなく、主体Bの承認によって与えられる。主体Bにおいても事態は同様である。そうであれば、「めぐりめぐってみずからの必然性をみずから作り出す」（石井2012, p. 201）という自己言及の構図が生じていることになる。
 - 5) 栗木（1996）では、切断の条件として人間の情報処理能力と記憶の不完全性が指摘されている。
 - 6) 以下の構図は、後述するウィトゲンシュタインの「規則に従うこと」について議論への懐疑とその解決に関する戸田山（1994）のそれを参考にしている。
 - 7) ここでの目的はウィトゲンシュタインの解釈の正しさを議論するものではない。けれどもあえて述べるならば、後述するウィトゲンシュタインの議論は規則のパラドックスを受け入れておらず、背理法により規則とその解釈を分離して考えることのまずさを論証していることから、Baker and Hacker（1984）や飯田（2004）・栗木（2012）が指摘するようにクリプキの議論は妥当性を欠いていると思われる。むしろそれは飯田（2004）がいうように、ウィトゲンシュタインをもとにしたクリプキによる別の新たな懐疑論と考えた方が良くであろう。
 - 8) このような指摘に関しては、Lynch（1993）、戸田山（1994）、酒井・小宮（2007）、小宮（2011）、水越（2014）、北田（2017）を参考にしている。
 - 9) このようなルール（構造）によって行為が可能になるという考え方は、酒井・小宮（2007）、前田・水川・岡田編（2007）、石井（2010）、小宮（2011）や酒井・浦野・前田・中村・小宮編（2016）を参考にしている。
 - 10) クラスという規則に学生が私的に従うことはできない。Wittgenstein（2009）は「人は規則に「私的に」従うことはできない。さもなければ、規則に従っていると思うことと規則に従うことが同じことになるだろうから」（邦訳p. 174）と指摘している。この私的に規則に従うことは、石井（2013）においても否定されている。
 - 11) 規則を述べる（定式化する）ことは、規則そのものではない。この点について西阪（1997）は「わたしたちは、しばしばこの実践の1つの記述でしかない『（規則の）定式』を規則そのものとり違えて、実体化してしまう。ここに混乱のもとがあるのだ」（p. 63）と指摘している。
 - 12) Winch（1958）が指摘するように「規則に従うという概念が、誤りをおかすという概念と論理的に不可分であり」（邦訳p. 39）、そうでなければ何らかの規則を規則と呼ぶことはできない。
 - 13) このことをさらに強くいえば、「後続する行為が先行する行為の理解に対して優先的な権利をもつ」（酒井・小宮2007, p. 82）ということになってしまう。これは石井（2004）において拒否されてきた消費者需要に単に適応するだけの自動機械としてのマーケティングに近似する。
 - 14) 村下（2007）において指摘されているようにモノにおける設計とデザインは階層が異なる。設計における物理学的知識をいかに展開しようとも、デザインが定まるわけではない。そこでは、モノに対する人為的なかたどり（デザイン）が欠かせない。

- 15) ここでの実践の考え方については酒井他編（2016）のそれを参考にしている。
- 16) このように実践におけるその妥当性や帰結についての判断を控え、それを理解しようとする方針はエスノメソドロジ的無関心と呼ばれる（Lynch 1993）。
- 17) このような概念を述語的に捉える考え方についてはFrege（1892）を参照。そこでは、「xは…である」の「…である」を概念・関数として捉え、xが満たされない限り文が成立しないことから、その特徴に不飽和（不完全）をみている。また、このような関数（funktion）・機能的なアプローチに比較の観点を持ち込んだものとしてはLuhmann（1962）を参照のこと。

参考文献

- 秋谷直矩（2010）「デザインとエスノメソドロジー——領域横断的实践のこれまでとこれから」『認知科学』17（3），pp. 525-535.
- 本條晴一朗（2015）「競争的・創発的使用価値を通じた消費者への企業の影響可能性—複雑系科学に基づく分析」『日本マーケティング学会 カンファレンス・プロシーディングス』4, pp. 434-442.
- 飯田隆（2004）『クリプキーことばは意味をもてるか』NHK出版.
- 石黒ひで（1993）「『言語論的転回』とはなにか」新田義弘ほか編『言語論的転回』岩波書店, pp. 87-116.
- 石原武政（1982）『マーケティング競争の構造』千倉書房.
- 石原武政（1996）「消費の実用的理由と文化的理由」石井淳蔵・石原武政編著『マーケティング・ダイナミズム：生産と欲望の超克』白桃書房, pp. 175-194.
- 石井淳蔵・石原武政編著（1996）『マーケティング・ダイナミズム：生産と欲望の超克』白桃書房.
- 石井淳蔵（1999）「競争的価値：その可能性の中心」石井淳蔵・石原武政編著（1999）『マーケティング・ダイアログ：意味の場としての市場』白桃書房, pp. 191-211.
- 石井淳蔵（2004）『マーケティングの神話』岩波書店.
- 石井淳蔵（2007）「競争的価値創発プロセス概念とケース記述の手法：競争プロセス，デザイン，そして身体性」『慶應経営論集』24（1），pp. 1-23.
- 石井淳蔵（2010）『マーケティングを学ぶ』筑摩書房.
- 石井淳蔵（2012）『マーケティング思考の可能性』岩波書店.
- 柄谷行人（1992）『探究 I』講談社.
- 川口高弘（2018）『価値共創時代におけるマーケティングの可能性』ミネルヴァ書房.
- 北田暁大（2017）「他者論のルーマン—経験的学としての社会システム論」『現代思想』45（6），pp. 202-219.
- 小宮友根（2011）『実践の中のジェンダー—法システムの社会学的記述』新曜社.
- 栗木契（1996）「消費とマーケティングを成り立たせる土台はどこにあるのか」石井淳蔵・石原武政編著『マーケティング・ダイナミズム：生産と欲望の超克』白桃書房, pp. 255-289.
- 栗木契（2012）『マーケティング・コンセプトを問い直す』有斐閣.

- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編 (2007) 『ワードマップ エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』新曜社.
- 前田泰樹 (2011) 「『痛み』の文法—ワイトゲンシュタインとエスノメソドロジー」 鬼界彰夫編著『ワイトゲンシュタイン』河出書房新社, pp. 141-146.
- 松井剛 (2013) 『ことばとマーケティング』碩学舎.
- 松原陽一 (1995) 「規則の認識論—クリプキ以降のワイトゲンシュタイン解釈」 飯田隆編『ワイトゲンシュタイン読本』法政大学出版, pp. 272-295.
- 水越康介 (2014) 「事例研究の実践的理解：科学はマーケティングか再訪」『日本情報経営学会誌』34 (2), pp. 111-123.
- 村下訓 (2007) 「マーケティングにおけるデザイン研究の射程—プロダクト・デザインの領分に照準して」『マーケティング・ジャーナル』27 (2), pp. 5-17.
- 西阪仰 (1997) 『相互行為分析という視点—文化と心の社会学的記述』金子書房.
- 小川進 (2013) 『ユーザー・イノベーション』東洋経済新報社.
- 酒井泰斗・小宮友根 (2007) 「社会システムの経験的記述とはいかなることか—意味秩序としての相互行為を例に」『ソシオロギス』31, pp. 62-85.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編 (2016) 『概念分析の社会学2—実践の社会理論』ナカニシヤ出版.
- 戸田山和久 (1994) 「ワイトゲンシュタイン的科学論」新田義弘編『岩波講座現代思想〈10〉科学論』岩波書店, pp. 139-170.
- 戸田山和久 (2019) 「現象学を再定義する—『ワードマップ現代現象学』第1部を読む」『フッサール研究』16, pp. 92-104.
- 山田圭一 (2020) 「社会科学の方法論について哲学は何を語りうるのか—ウィンチのワイトゲンシュタイン解釈の検討を通じて」『人文公共学研究論集』41, pp. 131-142.
- 吉田満梨 (2013) 「製品評価基準の変化を伴う新市場形成プロセス：カモ井加工紙株式会社「mt」の事例研究」『マーケティング・ジャーナル』32 (3), pp. 16-32.
- Baker, G. P. and Hacker, P. M. S. (1984) "On Misunderstanding Wittgenstein: Kripke's Private Language Argument", *Synthese*, 58, pp. 407-450.
- Bourdieu, P. (1979) *La Distinction : Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit (石井洋二郎訳『ディスタクシオン I : 社会的判断力批判』藤原書店, 1990年).
- Coulter, J. (1984) "Contingent and A Priori in Sequential Analysis", *Human Studies*, 6 (4), pp. 361-376.
- Frege, G. (1892) "Über Begriff und Gegenstand", *Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie*, XVI, pp.192-205 (藤村龍雄訳「概念と対象について」『フレーゲ哲学論集』岩波書店, pp. 65-84, 1988年).
- Kripke, A. S. (1982) *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Basil Blackwell (黒崎宏訳『ワイトゲンシュタインのパラドックス—規則・私的言語・他人の心』産業図書, 1983年).
- Luhmann, N. (1962) "Funktion und Kausalität", *Soziologische Aufklärung I*, Westdeutscher (土方昭訳「機

- 能と因果性」『ニコラス・ルーマン論文集2—社会システムのメタ理論』新泉社, pp. 3-49, 1984年).
- Lynch, M. (1993) *Scientific Practice and Ordinary Action*, Cambridge University Press (水川喜文・中村和生監訳『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房, 2012年).
- Marx, K. und Engels, F. (1962) *Das Kapital, WERKE*, Band 23, Dietz Verlag, Berlin (今村仁司・三島憲一・鈴木直訳『資本論 第一巻 上』筑摩書房, 2005年).
- Ryle, G. (1949) *The Concept of Mind*, Hutchinson (坂本百大・井上治子・服部裕幸訳『心の概念』みすず書房, 1987年).
- Suchman, L. (1987) *Plans and Situated Action*, Cambridge University Press (佐伯胖監訳, 上野直樹・水川喜文・鈴木栄幸訳『プランと状況的行為—人間-機械コミュニケーションの可能性』産業図書, 1999年).
- Winch, P. (1958) *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, Routledge & Kegan Paul (森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社, 1977年).
- Wittgenstein, L. (2009) *Philosophical Investigations, 4th Edition*, Basil Blackwell (鬼界彰夫訳『哲学探究』講談社, 2020年).

(おおたに・たいと 英語国際学部講師)